

佐藤岳詩『R・M・ヘアの道德哲学』

勁草書房、二〇二二年

伊 勢 田 哲 治

本書はR・M・ヘアの道德哲学を新たな視点で読みなおそうという意欲に満ちた著作である。とりわけ九〇年代以降の晩年のヘアの著作を中心に、ヘアの立場を一貫したものとして読み解こうとする点はこれまでのヘア研究にないアプローチである。

以下、まず本書の概要を紹介したあと、本書の中心的な主張の一つに焦点をしばって検討を行いたい。なお、簡便のため、以下の書評内では、著者も使う記号法にもとづいて、ヘアの三つの主張をそれぞれM（道德の言語）FR（自由と理性）MT（道德的に考えること）と略し、九七年の著作Sorting Out EthicsはSEと略す。

第一章では、ヘアの九〇年代の著作を中心に、ヘアの道德哲学の全体像をどうとらえるかということが論じられる。この章における目立つ主張は、ヘアは非認知主義者ではない、という論点である（95以下）。非認知主義の定義によく使われるのは「道德判断は真理値を持たない」という特徴であるが、ヘア

はずっと道德判断には記述的側面があると主張してきており、その意味では真理値をもつと考えている。したがって、ヘアを非認知主義と分類するのは誤りだ、というのである。

第二章では普遍的指令主義から選好功利主義という、ヘアの立場の中心的な部分を紹介される。この章はおおむねオーソドックスなまとめを行なっているが、選好そのものが重要であって選好充足はあまり重視していない、という視点から「ヘアは一般的な意味での結果主義者とは言えない」（98）と結論しているあたりが目を引く。

第三章では選好功利主義が規範倫理学理論かという問いが考察される。そして、著者が出す驚くべき答えは、実はヘアの選好功利主義は規範倫理学理論ではない、ということである。その要点をまとめるなら、選好功利主義は、合理的な判断についての理論であり、個々の規範倫理学理論から中立に調停を行うための理論である、という観点から、選好功利主義そのものは

規範倫理學理論ではない（ただし合理性についての理論という意味では規範理論ではある）、と結論するのである。

第四章では、選好功利主義の導出の議論が検討され、実質的な原理としての普遍化可能性が導入されているかどうか、それともあくまで規範倫理學理論に中立に議論が進められているかが検討される。著者の考えでは、選好功利主義そのものは実質的な道德的結論につながるが、道德的選好（優越的な選好）について選好功利主義的比較考量を行うことで、それらの選好に体现される実質的道德的前提のおかげで結論も道德的結論になる、ということである（p. 111）。

第五章では優越性の概念が分析される。とりわけLMにおいて、道德原則を選ぶ際には「私はどんな種類の人間になろうとすべきか」を考える、と述べている箇所とMTでの優越性の議論を結びつけ、ヘアにとっては生き方を選ぶのが道德判断であると分析しているあたり（p. 112）が興味深い。

第六章はわれわれはなぜ道德的であるべきか、という問いを扱う。たとえば、普遍化可能な判断を下さない無道德主義者は、利那主義に陥ってしまうので、結局は普遍化可能な判断を下した方が得になる、というような議論などが目立つ（p. 202）。

第七章では道德哲学の役割と機能を考える、という趣旨で、二層理論が検討されている。ここで目を引く主張としては、道德教育の二つのモードとして、情緒主義（著者はこれを規範倫理學の目的は不合理な説得を行うことである、という主張と解して

いる。p. 208）と合理主義がお互いに補い合う、という考え方がある（p. 229）がある。

以上のように、通常のヘア解釈に見られない常識やぶりな解釈を次々に繰り出すのは本書の魅力であり、もしそれらの議論が説得的なものであれば、ヘア解釈の新時代を画すような書物となるだろう。ただ、今のところ評者の評価はそこまで肯定的なものではない。

まず、本書の基本的方針である、ヘアの主張が初期から晩年まで基本的には変わらなかったという立場からヘアの全体像をとらえようという目論見には大きな疑問がある。ヘアはその生涯に何度も大きなイノベーションを行なってきた。普遍化可能性、選好功利主義、二層理論など、ヘアの議論を彩る理論装置の多くは初期の議論には見られないもので、そうした概念が途中で導入されていること自体、ヘアの立場になんらかの変更があるということの何よりの証拠である。こうした証拠がある以上、ヘアの立場が一貫しているということをドグマ的に前提するのではなく、LM期、FR期、MT期、SE期のそれぞれヘア（そして必要に応じてその中間の重要な論文）を丁寧に読み比べ、本当に一貫しているのか、それともやはり変遷しているのかを考察するのが実り多いヘア解釈の態度だったのではないだろうか。

もう少し具体的に検討しよう。たとえば、著者が指摘するとおり、ヘアは、SEの中で、生涯ずっと認知主義者だった（つ

まり道徳言明に真理値を認めていた」と言う一方で、その真理の理論はクリスピン・ライトの九二年の本に依拠しているという。しかしこれは普通に考えればアナクロニズムであり、ヘアの主張割り引いて考えるべきところであるが、著者は額面どおりにうけとる。もちろん、このように読むことでたとえばLMの議論への理解が深まるのならよいが、著者は自分の解釈を使ってLMを読みなおそうとすらしていない（この議論をしている第一章にLMからの引用はほとんどない）。結果として、LMにおける非認知主義的な発言を単に無視するという、解釈者としての程度本気なのかをはなはだ疑わせる結果となっている。

また、第五章でMTの優越性の概念についての議論とLMの一節を結びつけている箇所も疑問がある。この解釈はたしかに独創的だといえなくはないが、まったく関係ない箇所二つを結びつけてキメラ的な解釈をでっち上げているとも見える。LMの該当箇所(63節)はまだヘアが優越性という概念にたどりつく前に書かれているのだが、著者の紹介(51)「」だけを讀んでいる読者は、LMにおいてヘアが優越性について明示的に語っているという印象をうけるだろう。もちろん二つの箇所の話題に類似性はあるが、だからといってその共通点に簡単にとびついてしまわないで、似て非なる話をしている可能性をもっと慎重に検討してから話をすすめるべきではないか。わたしには少なくとも、「ある価値に優越性を認める」とことと「生き方を選ぶ」ことはまったく独立の二つのことであり、この二つを

同一視することでかえって頭が混乱してしまうようにしか思えない。

次に気になるのは、著者の独創的な解釈はどの程度テキスト上の根拠があるのだろうかということである。たとえば第二章のヘアは結果主義者ではないという主張の根拠として、ヘアが問題にしたのは「行為そのものではなく判断である」(59)と云うことが挙げられているが、ヘアが行為など問題としないと言っているような箇所はまったく引用されていない。さらに言えばヘアが一貫して指令主義者である以上（これは確かに一貫性をみとめてよい部分である）、判断と行為の間には当然密接な関係がある。つまり、ヘアが行為など問題にしないという主張に対しては証拠はなく、むしろ行為を問題にするはずだとおもわれる状況証拠があるのに、著者はこういう主張をするわけである。あるいは、第四章の、道徳的選好を扱うときだけ選好功利主義が道徳的な結論につながるという主張も典拠が疑わしい。確かに道徳的選好に類する概念はMTに出てくるが、それは第一〇章になってからである。「道徳的推論の理論」(MT, p. 107, 邦訳p. 61)を組み立てているとヘア自身が言う第六章では選好一般が扱われている。

もっとはつきりと問題を指摘できる箇所もある。普遍化可能な判断を下さない無道徳主義者は、利那主義に陥ってしまう、という第六章の議論で参照されているヘアのテキストを見ると、無道徳主義ではなく、一見自明の規則に従う必要があるかどうか

かを論じている部分で、まったく無道徳主義とは関係ない (MT p. 192, 邦訳 p. 287)。なお、p. 202 の引用のスタイルも、ヘア自身がこの箇所が無道徳主義者という言葉を出して論じているかのようには読者をミスリードするもので、非常に問題がある)。一見自明の原則を採用するかどうかは、ヘアの用語で言えば、普遍的な判断をするかどうかではなく、一般的 (general) な判断をするかどうかに関わる話である (この区別については MT p. 41, 邦訳 p. 82 参照)。著者の議論は「普遍的」と「一般的」の区別がうまく使いきなせていないために混乱しているように見えるが、もし本当にそのレベルの誤解をしているのなら、著者がヘアをどの程度理解できているのか心もとないと言わざるをえない。

第三に、通常の倫理学用語と著者の用語法のずれが気になる。具体的には、第七章で情緒主義を道徳の言語についての理論ではなく道徳の目的についての理論として解釈している点や、第三章でヘアにおいては功利主義が規範倫理学理論ではない、と簡単に結論してしまっているあたりなどである。仮に十分な理由があつてそうした用語法を選んでいるにせよ、定着した用法のある言葉を意味をずらして使うのは、議論を混乱させるだけで何もよいことはない。

さて、いろいろ細かい議論を検討してきたが、それでは本書の最も目を引く主張である、「選好功利主義は規範倫理学理論ではない」(p. 83) というテーゼはどうだろうか。これが十分

説得的に論じられていなければ、本書はなお十分に意義があるといえるだろう。さて、しかし本稿で評者に与えられた紙数はつきってしまった。これについては、評者のブログ (<http://blog.livedoor.jp/iseda503/archives/1764541.htm>) で詳細を検討したが、結論だけ言うならば、これもまたヘア自身のテキスト上に根拠のとほしい、思い込みの連鎖によつて成立している解釈であるという印象をぬぐえない。

以上、大変厳しい言葉のならば書評となったが、著者が将来有望な意欲ある若手研究者であるということは全く否定するものではない。本書でその意欲の発揮され方には危ういものを感じざるをえなかったが、この意欲を持ち続けるなら、きっと大きな仕事をしてくれるものと期待する。

(いせだ てつじ・京都大学)